

1 学年だより

夢の宅配便

1 年学年主任
水野 高代治

すり替えない心 NO6

失敗したり、間違ってしまった、いけない行動をすれば注意されるのが普通です。注意のされ方は優しく言われることもあれば、厳しく言われることもあります。どちらにしても、失敗したり間違っていたことは事実です。しかし、自分が失敗したことを棚に上げて、注意のされ方が嫌だったなどの愚痴をたまに聞くことがあります。確かに、注意のされかたが嫌だったという気持ちはわかりますが、だからと言って自分の過ちが消えたり、軽くなったりはしません。言われ方と自分の失敗はしっかり分けて考えることが大事だと思います。そこをしっかりと自覚していないと自分の過ちを反省しないまま通り過ぎてしまうことにもなると思います。反省する機会はとても大切で、自分をさらに成長させる節目ともなります。そのような節目を、反省しようとする気持ちより、言われ方が納得できないという気持ちを優先してしまうとその大切な機会を失うことにもなってしまいます。下手をすると、反省するどころか、注意した人の言い方に問題があるということに、注意した人が謝罪するというようなことにもなりかねません。このように、物事の話がすり替わってしまう結果になってしまうことも考えられます。

話のすり替えを覚えてしまうと、さまざまな場面で話のすり替えをしがちです。「私も間違いましたが、そんな言い方をしなくてもよいのではないですか？わたしは傷つきました。」などと、相手に謝らなければならないことを、した側がいつの間にか相手に謝罪を求める立場にすり替わってしまいました。本当ならば、ここで、自分の行動を見直すチャンスだったのにそのチャンスを消してしまいました。昔は、このように話をすり替えようとすると「自分のしたことを棚に上げて、何を言ってるのですか！」とそのすり替えている心を過ち以上にいけないことと注意されたものです。

「自分を棚に上げる」とは、自分にとって都合の悪いことに目を背け、他人のことを非難する様子を指す言い方です。「自分を棚に上げる」ことをしてはいませんか。立ち止まって自分を見つめてください。人は、無意識のうちに「自分を棚に上げる」ことをしてしまうことがあるから。